田舍莊子

丑

遠13
326
3

門 へ遠18
號 326
卷 3

田舍莊子卷下

目録

莊子右衛門ヶ傳
猫之妙術
莊子大意

田舍莊子巻下

東住士　佚齊樗山妄選

莊右衛門ゞ傳

獨りてくらしたり。曾て鉢ゝ丁用乃女
形。情ありて云て掩事ちく好ゞく書て
讀めとゞもゞくゞ爰文字ふも能乃
せゞと憚みて量と聞ゞらも俗人と居
る附ゞ俗人乃戯ゞ歩ゞて。楽ゞゞ事を
めゞ去てくりたり。常ゞ樗山の下泥水
ゞとゞ拾ゞ。ゞ姓名ゞ問へゞ。唐土莊子ゞ

し。稗・粟代りて日本ふるさとの。田の名にはしらしてらして。田村莊左衛門と名の事の。儒士あるを。常に来り給。一日その友莊左衛門ふ得く曰。世とともに何者とも名付べきやうなし。ぽふハ聖人乃道と。伝ぶるが。ばしくの社ごと。ひハる業が。ふ得ふ。羅とおうとなどの無まとまくぶしちあげて。いへどに社乃。若事ふ人ど。僧く賜とし。食と費を。儒。まもあるとど

あまきにして。情乃こゝろ者也。世ふるびきとのこゝ難たるべし。そもく業とゝれど。あるぬるこゝ人書らし。一つして実らさまを。世を經人と慈こゝ乃言ふあるべいへども。世用の費を也。幽軒ふ書ふし。今もこゝ人と陽く。聖人の教ふ法ひ。稗粟代と得く。威儀容與と正しぽふ。ふあるて人に名とゝこゝ。べし。莊左つが云。我と聖人ぬあるへ乃貴きこゝ人あるべ

豈人道とあるべして。徇巢。徇巢は安んぞ
者ならしめや。且荘子が荒唐の言を案ず
大筒なん。聖人は揺もりとおしよはあんど。
只力を無為ふ。知ふ知あると。我が神は
一支性痛みして。且多病なり。威儀は
備えなん。精微中庸の者は及ぶべきざ
ほ事成なり。只人欲の為ふ性命は
有と元失なん。死生一貫。得得一段の心は
ふもしなど。我が幸く。何の恨なくく。言と

め。汗と作く人ふもなん事成求めんや。夫
天地の名ふ。物各感どの事あると故は名い
春成く物り。出ハ秋と待く吟ど吾豈
瓦礫なんや。行ぞなく悲して云なかうん
世間は色非は失して。我が無ふる所くあるど
皆く物く化して。我心の感どは所成なる
乃く真戯言なん人乃ともひとおうんし
い面ども。戯を乃ち中ふ。人は化けべるぶ
ざしハなるぶ

猫之妙術

勝軒しゆん剣術者わりを家よ入りる龍
ちく白晝よりけまりを庭亭前を同と
そそくりて何乃猫よ輪しちりんしと彼
龍進く猫乃つく荒びうり。咬付きを
ど猫声と立て逃去りぬ。ぱ為てハ時
もじらくされしを迫急おく逃物乃
名の如きそう猫ども。お伸さうしを彼一
向へ進入きれど。龍を座のをみふをまね

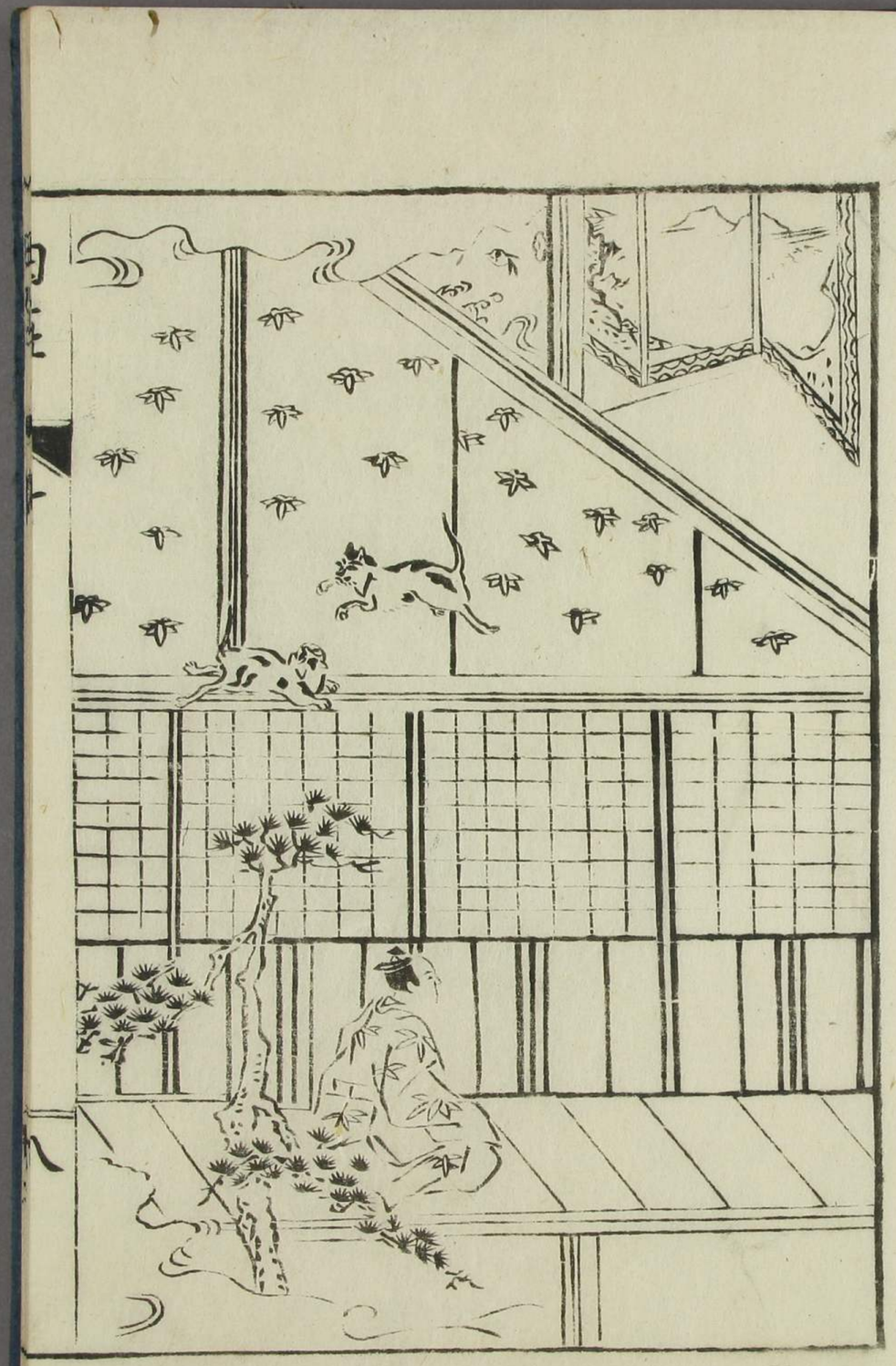
居く猫乃ほ一ば荒びうを咬付ををを
をさ匂しく見へきれど猫どもるかりごみ
して進まだ亭を後とてびうを水乃
と捉打殺さんを進まつて言を先より
りわけおく水乃ふあしびそこう戸
障子うしかやどたきやぶを先龍を
中と荒びて真さをを半電光乃ちつる
ごごしつてをれだ亭をれつへ荒うり
咬付べき瑞ひあり猫牙入わをとおし僕

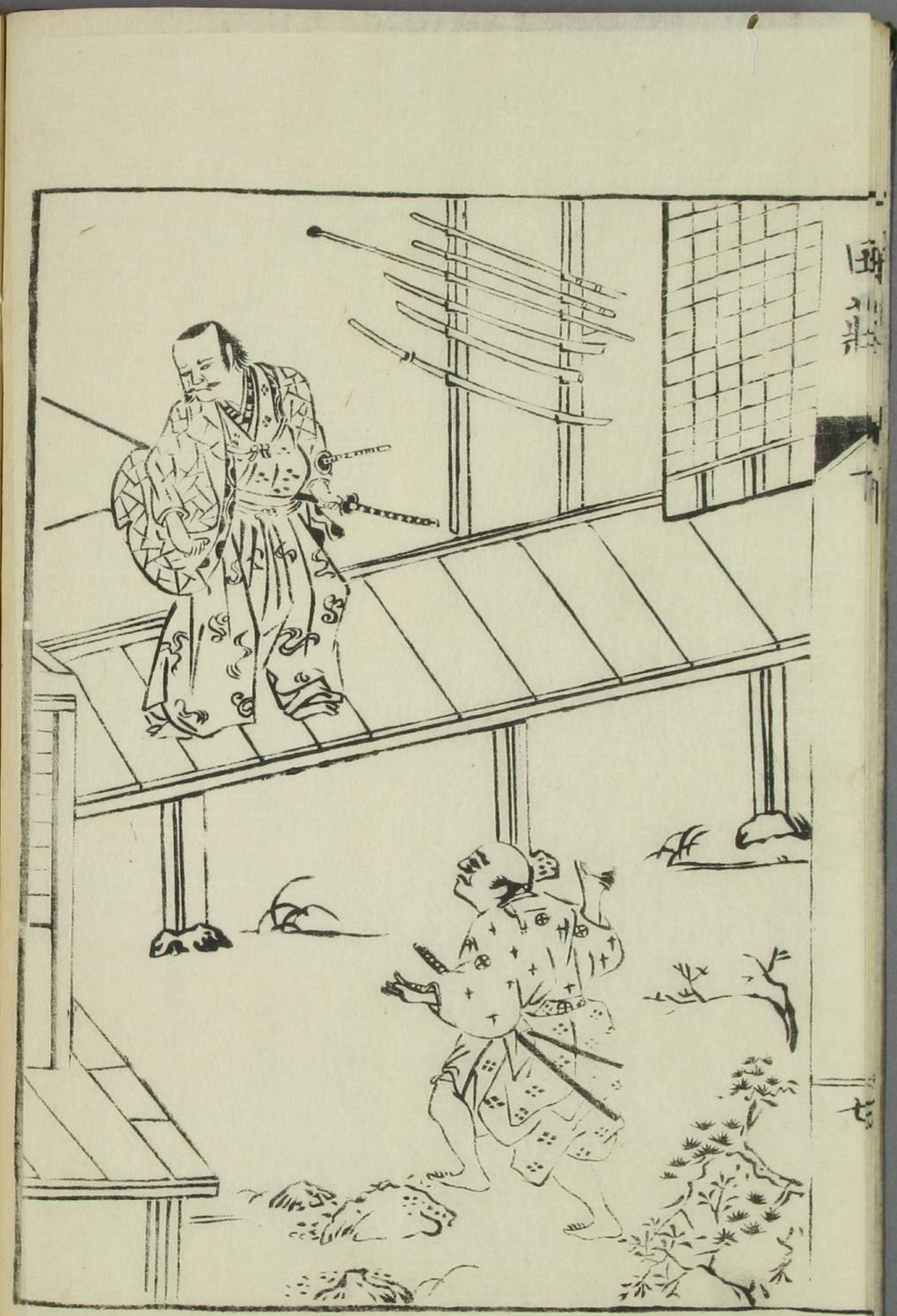
と呼て云。是より六七町ゝ行ば。其れ遊和の
猫ときこゆ。くらべて来れとて。別人をつかハ
し。彼猫とつれしてくるゝふを。利口げに
もたくさんなりきこゆ。是をそれ者ふ
ぜん進つくゝ入ゝておけ。彼猫式
入れば。嵐をくゝて。初て。猫何の事とおもく。
のろ〳〵ゆき。〳〵ムラ人く来りきつて。件
の猫ども。彼家くわつまと。彼猫と。ざしゝ
ゝ。何も来る。跪づき我〳〵遊和の名式

峠ぶれ。ゝ道ゝ彼漢し嵐しとぶふいとで籠秋
ゝりとゝとりの刹ぶ。爪と併ゝ。ゝ。
まぶ。ゝ。嵐あゝる事と。ゝ。何の術
ゝ。富易くゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
ゝ。公式術と。ゝ。ゝ。ゝ。
猫笑ゝ。何ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
に働ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。

うけのちうんこを。中ふすごとに。黒猫一疋
すくこを。我レ嵐とこゝ。ほの家ふせ。こを道よん
ゲけ。七尺乃屏風と。飛び越ち。いこに穴とゝで
つ。猫ゑの間ゝり。早ゝ。ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。
ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。
おこりて。柳梁と。ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。
ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。
出合。一生れ。ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。
古猫乃。ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。

いもゝ。ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。
れ。ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。
也。ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。
と。ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。
鼠。ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。
古人。ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。
ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。
ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。
とする者。ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。





いへども。道ゆきすぐれ。只巧みに專らとする時
は。彼れ猫より向の方覺都る寄る成れ
事なり。是をもつて工夫をなべし。又
虎毛の大猫一疋ありおのれ武術
を氣絶とそなり。故ゆえ氣絶練るの久しく今
真氣を話を測りて。天地を充るごとく
し。敵と御ゆえ論を。先ず勝く絶して後進
む。声ふ沈む。郷音を強くして荒とを奪ふ
爽丹無ぜじくいとかし。而他と用るを

やくして。而他とうづく傳歩柳梁と走
荒を。ふくみおくして。荒を絶を後
絶荒。ふるに形をくぼ丹迹明。荒いうする
ものをや。古猫乃を。湯の陰を孫を形ハ荒と
氣乃響丹素して傳くその中我を持ひ
ふくくく無り。書乃若をものくあるば
我やおのくくぼひくくくくくくくば。敵を赤中ぶ
て来ば又やおのに。中ぶをぶれのある時を
いうん。我を憂つて。捷ぐんくくれで敵をまさ

憂ひく来れば。憂こんぐれりのある時
もいうひ。憂我乃ふ。剛みしく。敵こうか。羅のん
や。嬉を。剛して。天地みこつるがごとく。見る
れるのち。皆氣の。敵ようり。盃ろれ。活然ば氣
小似て。実ハ異也。彼ハ明と。載せく。剛健こ
此を。勝小。素として。剛健ようも。あふこを。周も
亦同じうしば。河の。嘯流し。一秋。渡ふ
れ。勝ようのぶし。且。氣。響小。屈せぶ。ふしの。
あれ。河をいこん。窮。嵐。却て。猶ふ。猶し

いふしあるも。彼ふを。必死小。迫ふく。特じ。而れ。
生ふ。忘ふ。歌ふ。忘ふ。猶。質と。必しせど。ふ。ふと
全ふ。れ乃ふ。ふ。故ふ。真。志。全。鉄。のぶし。
めふ。ふハ。豊。氣。勝。ふん。脇。ふべ。きんや。又ふの。毛
れ。小。幸。閑。ふう。猫。ふ。び。ふ。進。て。ふ。れ。氣ハ
時。ふ。りの。ふ。いへ。ふ。ふも。象。あり。氣。あ。れ。りの。ハ。微。ん
とい。面。ふも。見。小。べし。我。レ。心。ふ。練。ふ。ふし。久。し。
勝。ふ。ふ。ふ。ふ。物。ふ。ず。不。氣。相。和。して。不。変。彼。
ふ。ふ。ふ。ふ。彼。小。深。我。ふ。御。ハ。唯。幕

と云。磯氏受ぬ。漁猟をしいへども。
我ら敵せんとしてしかべきあるべし。行くよ人今日
は風響みと屋せん。和一も無ぜど。素性林
乃ごし。我いいもさめりものと見ど。お猫のを。
山の和しいよものへ。自然れ和よわしば。思て和を
をもものを敵乃統氣とくづまひしをれども。
まげふ今ふくれば敵其機とわるん代寄く
和をもバ。氣濁て慣ふらしひてをを河へ。
自然乃感と始ぐ。しおの感をふく河を

始用何也乃而ふるもぜんや。只ふふもく。
をふふもをく。感よ汲く動く河を我レふ
氣形。氣を河ふを。天下我ふ敵をべきりのを
し。拙りと以た。各れ他をれ而。悪く主用乃
事をりしいよはわしば。道器一貫乃義をもべ
而作乃中に。武地と合りり。氣ハ一君れ用と
をものをり。其氣器をふれ河へ物の悪
をふふと。彩りをく。和をふ河へかと聞へしわ
す。今石をおくりてをを。作るふの悪と

いへども。ゆゑ不念無ふいふれども。皆仏意とし
て。道体乃ち我よりあらざるものゝ猫
なりして。我に敵をなれ乃ち人あるを。我何の術と
う用んや。云々して。無量無邊どうのゝ意をと
いへども。道場りをしに我がいふ所をとん動揺と
なりしべからざるべし。我障碍なる猫あり。終日眠り
居て。鼠響をなす。ゆゑに作りて猫入ごとし。人
を荒とすれども。彼猫の動ぐ所
を荒とせず。彼猫の動ぐ所
を荒とせず。我行く其

所と同。彼猫不言ども。四度同へども。四度不言。不
言ゆへ。言ゆへ。言ゆへ。不知也。そもそも知れ。
知るものを不言。いふものは知らざるなり。彼
猫をどのゝ式志を物式志をもくるる帰
を。休武ふして。不数といふものなり。我もし
彼よりの及ばざる事遠し。猫将義れどもいふ言とせ
て。出くる猫式撫して曰。我剣術を陰ぬる事
久し。いまだ道と極めず。今貴各乃術をせて。
吾が道乃極所式知らず。我つくる所を奥彼と

ためしめ給へ。猫を。獣のよりも。荒い吾が食
也。吾何を人のもとめる所にしんや。行はれんれ
竊に学し事あるを。是剣術にある人の常の
と驚るふあらば。人変ふ隙くせ死とぬしらう
にもて術也。江戸の者。常ふいふ義の長
術と陸せもしばあるべしば。あるえ。生死の
理を徹し。此心偏執なく。不能不惑。生死
田畑風ゆるものく。心亀和平ふして。
物なく。潭然として。常すれば。変を意る

と自在なるべし。此心をつふ和ある所を
状あり。状なる所。敵あるを。我あるを。和
て敵。敵を変化乃妙用自在なるべ我が
心死地なるに。霊明式業。何で快
立くの心に猶屈と決せし。面しひ猶ら
しる。めらう勝とりのふものなり。剣術の形前
再はあらば。無とて。廻空といふ。ふいのらど。
ふりと取るる。物式蓄面べらば。僅ふ蓄同る所へ。
気と亦を亦なる倍る。此気僅ふ倍所

融通繼遠ならざるべし。向ふ所を過ふて不回所を不級すれば過ぎる時は警醒
なくんばむべからず及ぶ時は飽く用ひ
おこたる共は変に為ざるべ遁るべ我が所謂
といふを不著不撓敵とすべく我もなく物
来ればよく応じて迹なしと乃
易曰無思無為寂然不動感而遂通於天
下之故一心理なくして剣術に学ぶ者は道
にらず　後軒云何なる敵なく我なしといふ

猫云我あるが故に敵あり。我なければ敵なし。
敵といふもの。もし対待乃名なく陰陽水火の類に
ざるべし。形象あれば対あるものなり。対なるものの
ある。我ひとり敵なくんば対なしなるものなり。対なるも
のの名なき所なり。是敵なくして我なし。
そなはる物と成ぬ共忘れずして一心敵乃形とつゝむ
ことなかれ。我をもつて不知歩いあるべし。此心全く
感乃ままに動くべし。此心澤然として無事

なる時は。世界は我が世界なり。色相は我が心なり。若樂は失の
澤なれば調也。皆我が心なり。若樂は失の
境界とすれば。天地廣しといへども。我が心なり
ゆゑ求めべきなし。古人曰眼裏有塵三
界宛心頭無事一生寛 眼の中まづふ塵あれば
八河を眼にしてなを事一結なれば。元来なしの
て。ひとつとして平へ。物をへだてなくば。
此心乃ち佛人なり 又曰。子百人の敵乃中ふ
をなくして。我心を我が物なり

大敵といへども。色相いかんとも能なし能なし
孔子曰。匹夫奪志し。若遠ふ樹ふ。此心
却て敵に助しるふ。我が心不動ふ歩。只相
応して。我ゆゑ求めべし。師を主事と為へ。
識をもつて。其眞識なるべし。我ふあり。色識
自性なし。心識なしも。教の外別伝なしも
いふべし。教とそなへくもいふはあらず。師も佛。
し能をさとるといふなり。只禪學乃ふあらず
聖人は仏法なり。藝術乃教ふ自性

乃ちうれ欣心悟心なり。教外別傳也。教
といふものとは乃ちふかくこれうり見れとも
能はざるなり。拾して知る三ゆる乃ち。師ちなる
ものと授るふはあらず。教るこゝろもやもく。教ちなる
こゝろもやもく。ものとは乃ちふあれ知て行て
我がこゝろのまゝにしこ那しこゝ其成見性
いふ。悟りなり。妄想乃ち夢也。悟りなり。覺し
いふ。迷をおれば。かゝりうるこゝろ事ふはあらず

田舍莊子卷下終